



本号の表紙の絵は木田金次郎が脳出血で亡くなる2年前の作品である。『夏の岩内港』という表題の絵を見ながら、約25年前の大学院時代のことが思い出された。

「では第一問。この肖像画の作者は誰でしょう」大学院の卒業試験の副査になられたM教授室の壁に掛けられた肖像画の作者名が大学院卒業試験の第一問であった。その絵にはやや痩せた威厳のある人物の顔が描かれていた。この想定外の質問に当惑するだけで、作者名を思い起こすことがまったくできな

見極める眼力

情報広報部

橋本 洋一

かった。「木田金次郎の絵だよ。当教室のN教授の肖像画だ。構内にはまだいくつか木田画伯の絵があるはずだ。北海道を代表する木田金次郎の作品くらい覚えていてほしいね」木田金次郎の名前が刻印されたのはこの時であった。

その後間もなくして木田文子夫人とお会いする機会を得て、ある信頼のおける人を介して木田画伯の絵をたまたま購入することになった。彼が生まれ育った岩内の神社の秋の風景が描かれた作品であった。現在、木田金

次郎美術館で閲覧できる。

木田作品を購入したことを契機に、数点の木田作品を購入しないかとある画商から勧められたが、私のへそくりを大幅に超える額だったので、厳しい妻の監視網を潜り抜けて購入に漕ぎ着けることに多大な困難を伴った。「木田金次郎の作品はめりはりのきいた油絵だから贋作が出まわっているので注意した方がいいですよ」と注意を喚起してくれる美術商もいた。

さらに、その後、岩内の隣町の共和町にある西村計雄美術館でその作品を見たり、直接、西村計雄画伯とお会いすることができて数点の絵を購入することになった。ある時、

懇意にしているある友人を通して、西村計雄美術館に設置されているような畳1/3もの大ききの作品を買ってほしいと依頼されたが、あまりの安価さのために購入するのを遠慮した。中央画壇と関係なく、生まれ故郷の岩内で活動した木田とピカソの画商に見いだされ、パリにアトリエをおいて国際的に活動した西村の両画家の生き方があまりにも対照的であるが、贋作(贋物)が出まわっているという点では共通項があるのかもしれない。突然、我々の前に地域包括ケア病棟が提示

された。平成26年度の診療報酬の大きなポイントの1つであるウィングラスの上縁に位置する約36万床まで膨れあがった一般病棟7対1入院基本料の施設基準を厳格化(A項目から「血圧測定」「時間尿測定」を削除し、「呼吸ケア」から喀痰吸引のみの場合も除外し、「専門的な治療・処置」の内容も抗悪性腫瘍剤や麻薬の内服等を含有する)したが、この地域包括ケア病棟は①急性期病床からの患者の受け入れ②在宅等にいる患者の緊急時の受け入れ③在宅への復帰支援、の3つの機能が期待されており、視点を変えてみると、7対1病棟の受け皿になるというもう一つの役割がみえてくる。

この地域包括ケア病棟の施設基準は7対1病棟の施設基準をやや緩和した条件設定になつてはいるものの、上記の厳格化したA項目に加えて在宅復帰率7割以上、1日2単位以上のリハビリテーション提供等、かなりハードルが高いものになっている。はやくも地域包括ケア病棟協会が発足し、100を越える会員がすでに加盟し、この病棟への転換が迅速に行われる様相を呈しているが、一方で本年度9月末で表舞台から静かに姿を消す亜急性病棟の二の舞にならないことを、そして今後の地域医療の主役として、贋物ならぬ本物ぶりを遺憾なく発揮し、定着していくかを冷静な眼で見極める眼力が必要である。